

防風林アートプロジェクト

WINDBREAK FOREST ART PROJECT



前：阿部典英《モシカシタラあるいは隆起》1980・2014年／後：柿崎照《万感飾》2014年

【防風林アート野外展示】

会期：2014年2月1日～2月16日

会場：空港線沿い防風林及び雪原（帯広市愛国町東1線9番）

主催：帯広コンテンポラリーアート2013実行委員会、十勝文化団体協議会

共催：公益財団法人北海道文化財団、帯広市、帯広教育委員会

後援：北海道、北海道教育委員会、愛国小学校110周年記念協賛会、帯広畜産大学地域連携推進センター

内容：十勝の原風景ともいえる耕地防風林と周辺の雪原を舞台に、最も寒さの厳しい季節に開かれた野外アート展。2011年の「真正闇の100日」に続く「帯広コンテンポラリーアート」の一環として開催された「防風林アートプロジェクト2013-14」のメイン企画であり、北海道在住の美術家を中心に道外作家を加えた47作家が参加した。

特徴：広大な雪原の上や、防風林の木々に絡めて設置された作品は、この環境がもつ、寒さ、強風、雪原、樹列、さらには開拓の歴史や農地であることなどの特性と向き合い、それらといかに関係するかを考える姿勢によって、造形物や素材を持ち込み展開したものである。厳しい寒さを利用し、現場に泊まり込んで氷柱を成長させた作品や、強い風を受けて廻ったり音が鳴る作品、雪が積もることで成立する作品などもあった。会期中に吹雪で飛ばされたり、雪で埋もれても、自然と作品とのコラボレーションであると位置づけ、作品の一部ととらえる方針をとったことも特徴のひとつである。

南北400m、東西600m（東京ドーム5個分の広さ）という圧倒的な広さの前では、いかに大作を制作しても点景となってしまうが、自然と真っ向から向き合い表現された作品は、この耕地が苛酷な環境のなかで先人達が開墾したことと響き合い、人と自然の関係を深く考えさせるものでもあった。

また、春から秋にかけては小麦、ビート、じゃがいも、大豆などが作られている農地を舞台としているため、命の支えでもある「北海道の農業」を強く意識し、農業とアートの新しい展開を試みるものでもあった。部外者の立ち入りが厳しく制限されている農地を特別に借りていることから、菌の透過を防ぐシートを敷ききつめたり、入場前に靴を殺菌するなど厳重な管理が行われた。

なお、「防風林アートプロジェクト2013-14」は、この他に2013年9月に行った「ファイタープロジェクト」及び参加作家小品展の三本柱で構成されていた。

参加作家（47名）：

赤坂真一郎、阿地信美智、阿部典英、阿部安伸、荒井善則、池田緑、伊藤明彦、伊藤華織、上ノ大作、潮田友子、梅田マサノリ、大石俊久、伽井丹彌、柿崎照、柏倉一統、加藤哲、唐牛幸史、古賀和子、坂口寛敏、櫻井亮、塩田晃、澁谷俊彦、下沢敏也、白濱雅也、鈴木順三郎、鈴木隆、高田K子、武井和典、谷口大、富田俊明、葦沢淳一、野口裕司、萩野明宏、林弘堯、伴翼、半谷学、藤本和彦、藤原千也、前田育子、松井淳紀、松岡つとむ、水野剛志、山岸せいじ、吉田茂、吉野隆幸、ラディ ウルフ、渡辺行夫



上ノ大作《氷筍(ヒョウジュン)》2014年
-10度以下となる厳寒の現場に2週間以上泊まり込み、夜を徹して水を垂らして約1.3mまで成長させた3本の氷柱。



松岡つとむ《ソラミミ(野風琴)》2014年
自作楽器などを手がける作者が、ここに吹く強い風を利用し、弦をふるわせて神秘的な音色を奏でる作品を設置。



吉野隆幸《心象覚》2014年
古い林檎箱を雪原から1mほどの高さに組み上げた作品。梯子から中に入ることもできる。



坂口寛敏《Field of silence》2013年
下部に墨を染み込ませた使い捨て防護服19着を木々の間に吊り下げたインスタレーション。風が吹くと一斉に膨らんだり手足をばたつかせる様が、原発事故を想起させる。

撮影：studio VALOS 戸塚良彦（上4点）